「特集 建設分野の魅力」第15回

ものづくりで地域貢献

住宅やビル、道路、橋など私たちの生活を守り、快適にする構造物を造り上げていく建設業の仕事。そこに関わる工事の種類は多様だが、どの職人も一様に口にするのが「形として長く残るものにかかわることのできる喜び」だ。現在、豊岡市で進められている県営豊岡一本松住宅の工事では、多種多様な職人が日々現場で力を合わせ、作業を進めている。このうち6人の職人に仕事にかける思いやこだわりを聞いた。

（取材協力＝兵庫県建設業育成魅力アップ協議会）

県営豊岡一本松住宅の工事現場を訪問

建設が進む「県営豊岡一本松住宅」。20を超える職種の職人が結集し完成に向け力を合わせている＝豊岡市庄境字中原

県営豊岡一本松住宅建築工事　老朽化が著しい「豊岡一本松鉄筋住宅（1973年建設）」と「豊岡一本松テラス住宅（72年建設）」の集約建替えを行う。全87戸分を2期に分けて建設する予定で、今回の第1期工事では鉄筋コンクリート造6階建て1棟42戸を建設する。2018年4月に完工予定

未来につなぐ
つくるひと・まもるひと

工事監理

安全で円滑に計画遂行

株式会社川嶋建設　平野　昇さん

朝8時。その日の工事に携わる全作業者を集めた朝礼が始まる。約30人の輪の中心にいるのが現場監督を務める平野さんだ。「工事が安全で円滑に進むよう、多くの職人たちとのコミュニケーションを大切にしている」と自らの役割を説く。

設計図面を基に「何もないところから建物を完成まで導いていく」現場監督の仕事に携わって30年近くになる。図面に描かれた設備機器などの配置についても、うのみにせず、これまでの経験から利用者にとって使い勝手のよい位置を発注者に提案することもあるという。

数多くの現場を手掛けてきた。中でも城崎温泉での旅館の工事は特に印象深かったという。「旅館を営業しながらの工事で、作業時間に制約があり、利用者の安全を確保しながら苦難の多い工事だったが、完成して旅館のパンフレットを飾った時にはうれしさがこみ上げてきた」という。

但馬地域に多い降雨、降雪は工程を乱す要因となるため現場監督泣かせだというが「いかにその中で計画どおりに進めることができるかが腕の見せどころ」とも。

高校生らを建築現場の見学会に招いて建設業の仕事の魅力を伝える機会も多い。「風景になる仕事のやりがいを1人でも多くの若い人に伝えていきたい」と話す。

施工図をチェックする平野昇さん。高校生を招いての見学会も対応するという

型枠工

IT活用し業務効率化

株式会社中村建設ナカフサ　中村　泰樹さん

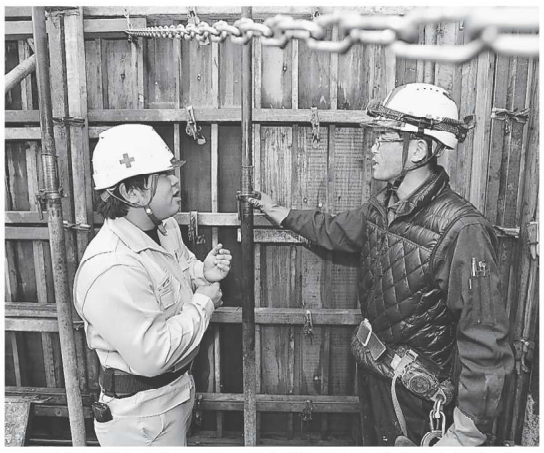
鉄筋コンクリートの建物は、コンクリートを建物の形の「枠」に流し込んで床や壁を作っていく。このコンクリートの形を決める枠を作り、「形を保持」させる事が型枠工の仕事だ。

中村さんの会社は但馬地域で型枠工事を主力事業としており、「『型枠は中村さんのところでないと』と声を掛けていただけることにやりがいを感じる」と話す。

この県営住宅の現場で中村さんは型枠工のリーダー役を担っている。「職人さんは施工図に書かれた細かい寸法の数字を全て頭に叩き込んで作業をしていることに感心させられる」と職人たちを敬いのまなざしで見つめる。

現在社を挙げて取り組んでいるのがITを活用した業務の効率化だ。これまでは熟練者が施工図から型枠の数字を読み取り、これを基に手作業でベニヤを切り出していた。このプロセスにITを導入し、型枠加工を機械で自動化できるようにした。「若手職人の仕事の負担を減らすことができるだけでなく、作業効率の向上に期待できる」と自身が開発に携わったシステムに大きな期待を寄せる。

昨年は高卒の社員が入社し、今現場でいきいきと働いているという。「型枠工の仕事が楽しいと思えるようにより働きやすい環境を整えていきたい」と日々考えている。



熟練型枠職人さんと打ち合わせをする中村泰樹さん（左）。より効率的な新しいシステムの普及にも力を入れている

左官工

経験が物を言う手作業

有限会社山西左官店　大上　武さん

この日の作業は塗装前の下地塗り。コテ板に盛った補修材をコテですくっては壁に手際よく塗りつけていく。凹凸のあったコンクリートの壁がたちまち平滑になっていく。「目視でも確認するが手の感覚でまっすぐに塗れているかどうかがわかる」と大上さん。左官の仕事は、壁や床にモルタルや漆喰、珪藻土などの材料を塗り、その建物の耐久性や意匠性、そして居住快適性を高める。

塗る場所によって10種類以上のコテを使い分けているという大上さん。「材料によって、また季節によって材料の乾くスピードが異なるので、材料の特長や気候も踏まえながら塗っている」という。「出来栄えを見てきれいに仕上がった時の達成感が大きい」とのこと。車で自分が携わった建物のそばを通るときは「よかった事や大変だった事、その一つ一つが思い出される」という。

父も左官職人で、幼い頃から仕事を手伝った記憶がある。左官職人になって15年がたつが、現役の左官として活躍する父に今も教えを乞うこともある。「特に塗る手順などいまだに学ぶことばかり」と父の背中を追い続ける。

「左官は機械化できない仕事。がんばって手に職をつければいつまででもできる」と左官の魅力を語る。

塗装前の下地塗りを行う大上武さん。現役左官の父の背中を今も追い続けている

未来に残る〝技の結晶〟

現場で活躍する6人に聞く

内装工

正確な仕事で信頼獲得

有限会社アースクリエイト　炭屋　広志さん

工事で使うスケール（定規）に書かれた目盛りの最小単位は1㍉だ。だが、炭屋さんはその間の「コンマ5㍉」に狙いを定めボードを切っていく。壁の角でも二つのボードがぴたりと合うのは、こうした細かい作業から生み出される。「すき間ができたとしても外側がクロスで覆われるので気にする必要はないと職人仲間にも言われるが、僕は許せない。すき間が見えたら即やり直し」と仕事へのこだわりを語る。

軽量鉄骨で下地を造り、そこにボードを張って間仕切り壁や天井の最終仕上げを行うのが内装工の仕事だ。これまで手掛けてきた仕事の中でも神戸の結婚式場の仕事は特に腕が鳴った。設計士が細部までこだわった曲線を多用した意匠を形にするため「炭屋さんでないと」と仕事を任され、天井の複雑な装飾の下地造りまでをこなした。

小さい頃からプラモデル作りが好きで手先の器用さには自信があった。「重たいものを運んだり、夏は暑く、冬は寒い仕事。でも、きれいに仕上げられた時の達成感はなにものにも代えがたい」

内装を仕上げた店舗に家族で訪れることがあると、子どもたちに「ここ、パパが内装をやったんやでと自慢することもある」とはにかむ。「炭屋さんが仕上げたところはやっぱりきれいやな」との言葉を励みに今日も現場へ向かう。

内装のボードを固定する炭屋広志さん。コンマ5㍉の精度を美学にして仕事に向き合っている

屋根工

小さな誤差も見逃さぬ

株式会社メタルクラフト　二位　剛さん

屋根工事初日のこの日。コンクリートがむき出しになった屋根部分に、まず40㍍の長さの防水シートをビスで打ち付ける作業から始まった。シートを張り終えると、後日金属製の屋根材をさらにその上からビスやアンカーで打ち付けていくという。「屋根がコンクリートからわずかでもずれると雨漏りの原因になる。いかにずれないように、すき間ができないように細心の注意で測定をしている」と一位さん。

この仕事を始めてから約20年がたつ。屋根工の仕事を始めた当初と比べると現場で使う電動工具が充電式になったことが一番の変化だという。「屋根は一旦仕上げると20年、30年は持つ。長持ちすればするほど自分の仕事が確かだったと感じることができる」とやりがいを語る。

現場は新築ばかりではない。屋根の下で人が生活、仕事をしている修理の現場では「迷惑がかからないようできるだけ早く工事を終える」ことを考え、手際のよい作業を追求している。

夏場になると屋根材からの熱もあいまって酷暑での作業になるため「1時間作業をしては30分休む」ようにしている。毎週日曜、第2、第4土曜の休み、そして毎日の午後6時退勤は厳守。「英気を養う時間もしっかりとってこそいい仕事につながる」とめりはりを大切にしている。

屋根部分に防水シートを打ち付ける。長持ちする屋根づくりがやりがいと言う二位剛さん（右）

塗装工

建物の意匠 大きく左右

有限会社大島塗装店　日置　一馬さん

塗装工の道に入って5年目の日置さん。最初はペンキ塗り程度のイメージしか持っていなかったが、現場に出てその奥深さに気付く。作業は、汚れて困る箇所や塗装箇所との境界をシートやテープなどで保護する養生作業から始まる。その後、壁と塗料の密着性を高めるための下塗り、意匠を作る塗装などの工程を経て最終的な塗装仕上げに移る。

中でも日置さんが神経を使うのが養生作業だ。「塗装がきれいに仕上がったとしても、他のところを汚してしまったら全てが台無しになる」からだ。また、完成後に手が触れやすいところは、下塗りの段階で研磨をし、上塗りの段階でもほこりが付かないようにし、手触りにまで気を遣う。「慣れない頃はいやなところばかりが目に付いて何度も辞めようと思った。でも現場を任されるようになり、やればやるだけきれいに塗れる実感が得られるようになって楽しくなった」

塗装工の仕事は仕上がりで建物の意匠を大きく左右するため、「目に見えて残る分やりがいもあるが、隠しようがないので恥ずかしい仕事はできない」と気概を語る。今はどの現場に出ても一番若いという日置さん。「学べば学ぶほどきれいに仕上げることができる。先輩から学べることは全てどん欲に吸収し、最高の商品が提供できるよう塗装の仕事をますます極めていきたい」との言葉が頼もしい。

玄関の塗装をする日置一馬さん。仕上がりを左右する養生作業は特に神経を使う

兵庫県建設業育成魅力アップ協議会

寄稿「連載を振り返って」

努力の先にある面白さ

連載「建設分野の魅力シリーズ」を通じて、さまざまな職種の職人の方々を紹介してきた。個性あふれる職人たちが、いかに緻密で丁寧な仕事をしているかがよく分かった。こだわりや信念を持って仕事をすることで、クライアントに喜ばれ、時には指名で仕事をもらったりすることもある。それがモチベーション向上につながっているようだ。

また、仕事に面白さを感じていることも分かった。彼らの共通点は、ある程度の経験を積んでいるというところにありそうだ。壁を平らに仕上げたり、タイルを真っすぐ貼ったりする仕事は、一見簡単そうでも一朝一夕に身につく技術ではない。彼らが、先輩たちを見て学び、自分の技術になるように改善していくプロセスの中で、次第に面白さが分かってくるのだろう。

一方、企業側も努力を怠っていない。入職を促そうと、情報通信技術（ICT）による材料の自動加工技術を導入し、一人前になるまでの時間の短縮に取り組んでいる企業、週休2日確保や夕方6時までに仕事を終了する企業、インターンシップを積極的に受け入れる企業など、労働環境の改善や新たな担い手確保にも取り組んでいる。新規採用、継続した雇用につながっている企業もあるようだ。雇用が続けば、仕事を任せられる。任せられれば、責任感を持って仕事に取り組み、仕事にやりがいを感じてくれるようになる。好循環を生み出したい。

仕事のやりがいについて、職人たちは「自分が造ったものが未来に残り、地域に貢献できる」と口をそろえる。家族や友人に造ったことを自慢できるということをうれしそうに話してくれることも印象的だった。その背景は、彼ら自身が「ものづくりが好き」ということだと思う。建設工事の機械化が進む中でも、まだまだ職人の手作業が不可欠だ。一つ手に職をつければ、長く続けていける仕事だ。プラモデルの組み立てや学校の図工の延長と考えると、チャレンジしてみたくなる仕事ではないだろうか。本連載が、建設業に目を向け、魅力を感じるきっかけとなり、多くの若者が建設業の道に進んでくれることを願いたい。

◇兵庫県建設業育成魅力アップ協議会は兵庫労働局、兵庫県、県教育委員会、兵庫県建設業協会、兵庫県電業協会、兵庫県空調衛生工業協会などで構成。